

葛葉猯琳は召喚師である

嘔吐羊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

副題「デビルサマナー葛葉ゲイリンVSバーテックス」

生まれついでこの霊感体質と、その体質とうまく付き合えなかったせいで孤独な青春を送っている主人公。

ある日出会った青年に、その体質をコントロールできる居る人達がいる世界へと転移させられる。

その青年と転移前後の状況から、主人公はこの世界がとあるゲームと同じ世界だと思っていたのだが……。

結城友奈は勇者であるシリーズと真・女神転生十四代目葛葉ライドウシリーズのクロスオーバー・ファン作品です。

物語は西暦の大災害前から時系列順に進みます。

また、オリ主・残酷な描写・独自解釈・独自設定・その他女神転生ネタを含みます。苦手な方はご注意ください。

目次

Prologue	1
Prologue—前世界より	6
葛葉ゲイリン	22

prologue

—西暦—北の大地—

徐々に速度を上げていく観光バスの上から、私は生まれ故郷へ続く道を眺めている。空は青く澄み渡っていて、空の切れ目にある山の頂には春も終わるといふのに雪がぶつている。その山間部へ向けて、見慣れた一本道が長く続いている。

私達を乗せているこのバスは、女性と子供からなる数十名の避難民を抱えている。その前後を車体を何処かしら歪ませている大小様々な種類の乗用車十数台が、このバスを護衛するように走っている。乗用車には避難民の男性達と避難誘導の為に派遣された人員が乗っている。

「もうこの道を見ることもなくなっちゃうのかな。」

スカートの裾を抑えつつ座っている私はつぶやいた。特に返事を求めたわけではなかったのだが、背後から言葉が返ってくる。特に返事を求めたわけではな

「いつか帰れる予測のカデゴリーだ。」

黒い学生帽を被り黒いマントを羽織った、全身ほとんど黒づくめの男子が答えた。普段来ている服も学ランである事から分かるように、彼も私とさほど年の変わらない学生

である。

彼は私と同じく、バスの上に腰かけ、私とは逆に前方を向いている。

「あはは、だとしてもなんだか複雑な気分だにやあ。」

その声には私は後方を向いたまま、話を続けることにした。

「此処の人達を守れなかったプロセスか？」

声の感じからして背後の彼も此方を見ずに話しているらしい。けれどその声には僅かに此方に気を使っている響きがあった。

「うんにゃ。前にも話したけれど、私は人だけじゃなくこの道から見える景色も守りたかったのかもしれない。この道を通ってどこか別の場所に行く事は考えていたけど、この道をこんな状況で見るとは思わなかった。」

そう言つて私はしばらくの間、道を曲がつて見えなくなるまでその景色を眺めていた。

道の先が見えなくなつた後、私は徐に振り返つていった。

「さーて、これからどこに行くのさ。」

さつきは少し湿っぽい雰囲気になつた気がしたので、少し明るい口調で彼に尋ねる。

「海を渡つて四国へ向かう、途中で補給も兼ねて東京へ行くプロセスだ。」

私とは対称に、彼は変わらない雰囲気で答える。相変わらず顔を此方には向けていないので、勿論表情は読み取れない。

「まあ、何処だろうとついて行くよ。もうすぐ勇者としては戦え無くなるからね。

君に守ってもらわなくちゃ。」

—「勇者」—

勇氣ある者を指し示すその言葉は、以前なら御伽噺などの物語のみで語られる言葉だった。

けれど3年前から続いている大災害をきっかけにその言葉の意味は変わった。

大きな地震と同時に空から飛来した謎の生命体「バーテックス」。それらは私たち人間を襲い、次々と殺して回った。人類は反撃を試みるも、奴らはいかなる現代文明の武器を持ってしても傷一つつけることは出来なかった。

その存在を唯一打倒出来るのは神様の力を与えられた少女たち。大災害以後は彼女らのことを勇者と呼ぶようになった。

そして私は北海道を守る勇者として選ばれ、日本で最も北で位置するこの土地と人々を守ってきた。

そんな私はもうじき戦う力を失う。私に力を与えてくださる神様「カムイ」の力は3年近くに渡る戦闘でほとんど尽きてしまっているから。

拠点としていた神社から避難する直前、神様が最後にありつたけの力を込めてくれたなんの変哲もない木片。掌に収まるサイズのこれが有れば、避難までの十数日は勇者の力を振るうことは出来るけれど。

「にしても東京つて残つてたんだね、やっぱり人が多いところはまだ戦えるんだねえ。」以前なら一度は都心のファッションのお店に行きたいなと思つたけれど、今はそれ程でもないと思う。

「いや、多分ほとんど人は残つていないセオリーだろう。残っているのは「君のようなサマナー」……そうだ。」

私はからかい混じりに彼の言葉に被せるように言つた。

日本で唯一、勇者がいないのに存続しているらしい都市「東京」。

実は彼と共に派遣されてきた人達と北海道民をまとめ上げている人物の会話を、私はこつそり聞いていた。敢えて質問することでちよつとしたイタズラに成功した私は、彼がどんな表情をしているのか気になった。

まあ、顔は相変わらず前を向いていて見えないのだが。

私が3年担つてきた「勇者」という役割が終わり、勇者でない彼らが私たちを守る。そう考えると奇妙なものだ。

勇者としてこれまで色々有つた記憶と様々な行き場の無い気持ち、思い浮かぶそれら

を大きなため息と一緒に吐き出す。大きなため息と一緒に吐き出す。彼がこちらを向いてなくてよかった。今の私の顔を見せたら彼は心配するだろう。

私はため息の理由を彼に悟られたく無くて。次の言葉がその理由だと思われたくて、話題を切り替える。

「ところで、そのカタカナ交じりの変な言葉、どうにかならない？ゲイリン。」

「承知しかねるセオリーだな、雪花。」

年の割には落ち着いた声だが、苦笑交じりに聞こえてきた。

p r o l o g u e — 前世界より

子供の頃、俺は所謂幽霊が見えていた。

見えるものは幽霊に留まらず〇ノケ姫のコダマのようなもの、宗教画で見られる鬼や悪魔のようなものまでが見えていた。それら異形のものには目が合ったり声に出してしまうと、俺に危害を加えてきたり、ついて回ったり、はたまた目的や意味が理解できないことをしてきた。

巻き込まれるのを避けるため見えないふり、気づかないふりが出来る様になるのに10歳くらいまでかかってしまった。

結果他の人には見えないものが見えていたせいで、俺は周りの人間から嘘つき呼ばわりされていた。

ただ嘘つき呼ばわりされるだけならまだ何とかかなったかもしれない。

俺の行動や言動以外の迷惑が周囲にかからなければ。

俺のことを助けたのか正義漢なのかは知らないが、俺の言動を正そうとしたり友人の輪に誘う生徒がいた。俺のことが気に食わないのか、余計なちよっかいを出してくる

ガキ大将もいた。そういった生徒らは異形の者にとっては俺の同類と思われたのか、俺と同様にちよっかいを出されていった。

俺と違い異形が見えていない彼らは、その原因を「俺に関わっている」以外に思いつける筈も無く、俺から離れるぐらいいしか出来なかつたのだろう。そうして俺に関わろうとしてくる生徒はだんだんと少なくなっていくた。

そうして家族を含む周囲が、腫れ物に触るような態度を取るようになって数年。青春らしい青春を謳歌出来ずに高校3年生になった俺は、大学受験の受験勉強に苦勞しつつ、将来に不安を抱いていた。

そんな秋口のある日の放課後、俺は帰り道に奇妙な存在を目にした。

良くも悪くもそいつが、俺の運命をあさつての方向に向かわせたのだ。

一日の授業の終わりを知らせる放課後のベルが鳴る。俺の学校では清掃は昼に行うので生徒たちはそのまま自由の身となる。部活に行く生徒、何処に遊びに行こうか相談する生徒など様々だが、みな一様に教室から移動するための支度を始めている。

そんな中ただ一人だけ、俺は席に座ったままで一枚の紙と向き合っただけで唸っていた。

彼が見ているのは大学の一次入試（センター試験とも言う）の模擬試験の結果である。

その結果は文系科目の成績こそやや悪いものの、総合偏差値は平均をなんとか超えている。有名な大学さえ選ばなければ問題はなさそうである。現に志望校のうち半数以上は高評価が出ている。志望校の選び方に俺の隠れた慎重さが垣間見えるが、俺が頭を悩ませているのは成績のことではない。

俺が在籍する高校では、この時期になると模試の結果を踏まえた担任との二者面談を行っている。一人にかかる時間は5分も無いものの、そのわずかな時間で志望校を弱点強化のための相談をする奴や、志望校の変更を諭されて決心した奴だっている。

そんな面談で担任の男性教師に俺が言われたことはたったの二つ。模試の結果を見せられて、

「結果を見ましたか、君の得意不得意がよく表れていますね。」

「ですがこのまま勉強を続ければ大丈夫でしょう。これで面談は終了です。」

何ともあっさりしたものである。時間にして30秒も掛かっていない。次の女子生徒には俺の分の時間まで使って10分弱は掛かっていたのに。

とはいえ、それは良い年した男性教師がその女子に色目を使っているわけではない……と思う。どちらかという俺の靈感体質が怖くて避けられているのだ。

俺の体質のせいでも人に避けられているのはよくあることだ。

他にも具体例を挙げてみよう。例えば俺の席配置もその一つだ。

俺の席は廊下側の一番後ろ、日に当たりにくいだの一秒でも早く帰れるだのと羨ましが
る奴もいるかもしれない。けれど俺のクラスに羨ましがらる奴はいない。

何故ならその席配置は俺の近くの生徒を極力少なくし、俺がいつ教室から抜けてもい
いようにする為の配置である。

俺の近くにいると異形たちの悪戯の対象になる確率が上がる。悪さをしているのが
異形だと分からなくても、被害を被る事だけは分かっている。

俺が教室からいなくなれば、俺に引き寄せられた異形たちは俺と一緒に出ていく。以
前余りにも周りに異形が集まりすぎたので無断で出て行ったことがあるが、戻った時に
一言言われるだけで済んだ。

話が大きく脱線したが、周囲は俺を避けるし、俺も周囲に関わらない事が習慣づいて
いる。このことが今俺を一番悩ませていることだった。

高校まではなんとかやってこれた。テストで必要なだけの点数を取って、宿題を提出
する。それらが血の付いたものに見えようと、多少破けていようと、大した問題じゃな
い（と俺は思っている）。

だが大学、そして社会に出れば人と関わらざるを得ないだろう。分野にもよるがゼミ
などは共同で長時間研究しなくてはならないだろう。成績から言って理系に向いてい
る俺なんかは、なおさら研究で他人と触れ合う機会が多い気がする。

社会で仕事をするにあたっても同様だ。一人で完結する仕事なんてほとんどない。伝統芸能の職人なんか、もしかしたら師匠以外と関わらなくて済むかもしれないが、買ってくれる客や小売店とはどうしても接触しなくてはならないだろう。さらに言えば工芸品などに異形が取り付きでもしたら、謂れのない呪われたアイテムの出来上がりだ。

今まで人と関わってこなかった故の自分の低いコミュ力と、異形たちの影響が合わさって最悪に思える。これからの人生をどうやって過ごしたらいいんだ……。

そうやって長い間、名案が浮かぶわけもないのに悩んでいた。気が付くと、クラスに残っているのは俺一人だけになっていた。

「帰るか。」

俺はそうやって問題を先送りにした。悩んでもしょうがないと。

日の入りが早くなってきたせいか少し薄暗い此処は、俺が通学に利用している学校の最寄り駅の前の広場。バスやタクシーのために少しだけ開けている駅の出入り口の前だった。

周囲には特に部活動に所属していないであろう生徒たちが、遊ぶために街へと繰り出している。そんな彼らに交じって、受験勉強の為に学習塾に通うであろう同級生らしき

人影が、単語帳や小さめの参考書を片手に歩いているのがぼつぼつと見受けられる。

他には早めに帰ることができる職業なのか、スーツ姿の大人たちの姿。そして近所に住んでいるであろう婦人たちが立ち話に興じている姿が見える。あと全く相手にされていないビラ配りをしている人も。

配っているのがティッシュペーパーだったら、結果は違うんだろうなと思う。そして、ビラ配りなら人と一瞬しか関わらないので自分にも向いているのでは、と根拠の無いことを考えながら前を向く。

駅前の人込みの中で一人だけ、俺の目に異質に映る存在がいた。

俺の目に映るその姿は青年男性にも女性にも、少年にも老人にも、天使にも悪魔にも見えた。あらゆる姿が重なって、体の輪郭がぼやける様に見えるその存在は、けれど何処かで見たようにも思えた。

そしてその存在感は今まで見てきた何よりも大きく、禍々しく、神々しいものだった。
(なんだ……あれは……。)

言葉にしてしまいそうだったが、それ以前に圧倒されて声が出ない。

見て見ぬフリを決め込みたかったのだが、その奇妙な存在感のせいでいつも通りの無

反応どころか目を離すこともできなかつた。

あれは普通の人間が関わってはいけな存在だと、本能的に理解する。

視線をずっと向けていたせいとその存在がこつちに気づく、気づいてしまう。

目が合った。合ってしまった。

その存在は何かに気づいたのか、少し驚いたような表情を見せた後にニヤリと笑つた。

その瞬間、緊張かそれとも恐怖か、俺の意識は途絶えた。

どれ程の時間、気を失っていたのだろうか。

寝すぎたような気怠さを感じつつ目覚めると、俺は奇妙な空間にいた。

まるで人口の迷宮のように道を形成した高くそびえ立つ壁、天井部分が開けていて空は真つ赤に染まっている。いや、満遍なく赤く光っている天井が高く遠すぎて、空のように見えるのかもしれない。

金色の壁と床に走る、空と同じ色の真つ赤な線は目に優しくない。

辺りはしんと静まり返っていて、人はおろか動物の気配さえ感じない。

こんな景色は住んでいる街には存在しない。

しかし、本来なら現実的ではない光景であるこの場所を、俺は知っていた。

突然だが、特に親しい友人などいない俺にとって、娯楽といえば専らアニメやゲームくらいなものである。

そのゲーム作品の中に女神転生というものがある。

その作品では主人公が俺が今まで見てきた異形の様なものと関わり、自身の生存を賭けた戦いへと挑んでいく物語。

その世界では天使であれ悪魔であれほとんど全ての異形を「悪魔」と総称する。主人公はそれら悪魔を時に従わせ・交渉し、時には打倒して道を切り開いていく。作品によつては自ら悪魔となつたり、悪魔に逆に従うこともある。

また、戦力が足りないと思つたら悪魔を合体させてより強い悪魔を生み出すこともできる。

そんな「悪魔」との戦いを描いた作品は、異形に対して何もできない現実から逃れることのできる、数少ない理想だった。

何でこんな回想をしたかというのと、目の前の光景がそのゲームで見た光景と瓜二つだからだ。

そのゲームで得た知識を基に鑑みるに、おそらくシリーズ大元の三作目である「真・女神転生Ⅲ」。

この空間はその作品に出てくる「アマラ経絡」と呼ばれる道のどこかだろう。

人の負の感情が生み出す「マガツヒ」と呼ばれるエネルギーが流れ、どこかへと送られていく道。道の途中ではそのマガツヒを求め、魑魅魍魎が跋扈しているはず。

ゲームの世界が現実になった、または俺がゲームの世界に入り込んだ。そんな信じられない可能性を、目の前の光景が否応なしに本当なのだという事を突きつけてくる。

何処からともなく悪魔が飛び出してくるのではないか、そう思つて周囲を警戒するとふいに気づく。

暗い色のハンチング帽をかぶった金髪の青年が少し離れた道の中央にいる。

この青年の姿には見覚えがある。放つ気配は先ほどの奇妙な存在と同じもの。

そして何より……

「やあ、起きたみたいだね。」

シリーズ通して登場する、最も強大で厄介な悪魔の擬態の一つである。

気を失う前に見た奇妙な存在。それと同一であろう青年が、バーカウンターにある座席の様な少し高めの椅子に腰かけている。

「君にぜひ行つてほしい世界がある。そこでは君のような存在がその力を扱う術を心得ているものが大勢いる。そこに行けば、君がずっと望んでいた力が手に入るだろう。」

青年は困惑している俺をお構いなしに、坦々と話し始めた。

「しかし、君がその世界に行くには二つの契約をしなくてはならない。一つは僕と、もう一つは世界との契約だ。」

青年は律儀に指を2本立てて、それを1本に戻すジェスチャーを交えながら説明する。

「僕との契約は君をその世界に連れていく為のもの。つまり案内をする僕に対する報酬を払う契約だ。世界との契約はこれから行く世界に適応しその世界に拒絶されない様にする為の契約だ。」

「此処までで質問は？今なら受け付けるよ。」

話を通じる事と姿が見覚え有るものに変わっている為か、俺は恐れを抱きつつも話せるくらいには落ち着いているようだ。

なのでまずは、なぜ俺がこのような提案をされているのか、その理由を尋ねた。

「理由か……。まあ大きく分けて二つある。」

一つは君のマグネタイト、霊力と言ったほうが分かりやすいかな。君は中々の霊力を持っているが、この世界ではそれが活かせていない。見たところそこいらの下級悪魔にさえ、対抗する手段を知らないようだ。

それを理由に将来を悲観し生きることままならないなら、いつそのことそれを活か

せる別な世界に行つてみないかい。職業の斡旋と大して変わらないよ、詰まる所はね。」
淡々とした口調で青年は話す。

如何なる理由かはわからないが此方の事情を把握しているらしい。

そして彼の話す内容が正しいのなら、悪魔が寄つて来た原因が俺のマグネタイト（＝
靈力）に引き寄せられてと言うことに納得がいく。

俺は理由は分かったと頷いて続きを促す。

「続けるよ。」

そしてもう一つは君の知識。これから君が向かう世界、その世界の辿るであろう未来の可能性は、こちらの世界では既に物語として語られている。正直言つて僕はその未来が少し気に食わない。

その物語を君は知っているし、当事者になれるなら君は未来を変えようとするだろう。僕はそう予測したからこそ、君にこうして提案している。」

提案するのがこの青年という事と俺の知識。となると十中八九は女神転生の世界だろうと予想できる。

もしかしたら今から行く世界はこの青年にとつて都合の悪い、例えば必要以上に秩序が保たれている「人類みな神の従僕」みたいな世界になるのかもしれない。

俺がそこそこのマグネタイト量を誇り、女神転生の原作知識もある。

未来を変えようとするかは疑問に思うものの、納得のできる理由だと思った。

俺が選ばれた理由は分かった。

次は先ほど言っていた契約の詳細を知りたい。

「順応が早くて助かるよ。」

そのまま君を連れていきたいところだが少々問題があるんだ。

本来君は元の世界の人間であって、これから行く世界にとつては君は異物だ。そのまま連れていけば世界そのものが排除しようとするだろう。それを避けるためには以前の世界との契約を断ち切り、新しく暮らす世界と契約しなければならぬ。

もう一つの契約はいたって簡単。世界を移動するなんて事を君一人でできるわけがないから僕が送ってあげよう。勿論悪魔を従わせる力が身につく場所へ。

最後に肝心の契約の対価だが……。」

「大したことじゃない。」

僕に支払うべき対価は肉体年齢及び寿命を十年分と云ったところか。

そして世界に支払う対価は、以前の世界でしか知り得ない知識や記憶を他の誰にも話せなくなる事だ。」

「それは……。」

対価として重いのだろうか、軽いのだろうか。

今までの人生18年で悪魔と契約した事など当然ながら一度もない。勿論世界とも。

この契約が俺にとって釣り合いの取れた取引なのか考え込む俺に、青年はさらに言葉を紡ぐ。

「困惑しているようだから言っておくと、僕との契約は半分以上は君のことを思うが故の契約だ。子供の学習能力や身体能力の成長性の高さと同じく、悪魔召喚師としての素質や能力は早いうちに伸ばしたほうがいい。

ならば転生して赤ん坊から素質を伸ばせばいい、と思うだろうが必ずしもそうとは言えない。転生して異世界に行く場合、その才能は転生後の肉体の影響を大きく受ける事となる。記憶や魂を引き継ぐとはいえ、中々の素質を持つその器を捨てる可能性があるのは勿体無いと思うよ。

だからこそ君を10年若返らせる。それだけだと寧ろ得だと思う人も多いし対価にならないから、その分の寿命を転移と若返りの対価として頂くよ。悪くない取引だと思うがね。」

うん若返れるなら悪くない、なんて簡単に納得いく自分がいる。悪くない取引なのが気になることがさらに増えた。

「さっき、悪魔召喚師って言いました?」

更に話を続けようとしているのを遮り、青年に尋ねる。

「悪魔召喚師」

文字通り悪魔と契約し、召喚し、使役する人たちのことである。俺はそれになるというのだろうか。

「召喚師では不満かい？それが嫌なら人為的に人を悪魔にする方法も無い訳では無いがね。あれは才能の有無に関係なく、適応する人間は極僅かだ。尋常でない苦痛を伴うし、万が一悪魔化できたとしても人であった頃の自我を保てる者は更にその一握りもない。それでも良ければ試してみるかい？」

首を横に振り、即座に否定する。俺の人格が消えるなんてまっぴら御免だし、自我を保てたとしても悪魔になって文字通りの修羅の道を歩むつもりはない。

「そうだね。君が君らしくある為にも悪魔召喚師、サマナーと呼ばれる彼らのようになるのがいいと僕は思うよ。」

話を戻そう。世界との契約が必要なのはさつき話した通りだ。契約の内容に関しては悪魔化しない理由とさほど変わらない。

世界に大きな影響を与えかねない異世界の知識。それ自体を消し去れば世界は何の抵抗もなく君の存在を受け入れるだろう。だがその場合、その記憶に根差した君の人格は歪むし、その世界の物語の記憶もなくなる。それじゃ送り出す人間が君である必要がなくなってしまう。

君の人格と記憶を保持したまま、世界に受け入れてもらう。その為の最低限の対価が「他人に話せない」という制約であり、世界に落とし込むための力が僕との契約。

これで納得はしてくれたかね。」

この内容もまあ、納得のいくと思う。

けれど正直に言つてゲーム内で説明してくれる時よりも丁寧な説明で、逆に怪しく感じてくる。女神転生の登場人物つて意味深な発言ばかりで終わる事が多いからな。特に目の前の青年のようなタイプは。

そんな風に怪しさを感じつつも、内容に不審な点は無いし俺にとつても損はない。俺はこの青年と契約を交わすことにした。

「ありがとう、じゃあ早速契約に移ろう。方法は簡単。僕の手をつかんで、「契約する」と一言言つてくれればいい。」

そういつて差し出された右手を、同じく右手で握手する形で掴む。「契約する。」

失つた青春を取り戻す。霊感体質を改善し、サマナーという確か(?)な職を手にする。そんな決意を込めて言う。すると対価であろう何かが、右手を伝つて俺の体から抜けていった。妙な感覚だった。

「改めて、引き受けてくれてありがとう。」

晴れて君はこれから新しい世界へと向かう。存分に思うがままに生きてほしい。最後になるが言い残したことはもう無いかい？」

そういわれて俺は右手をつかんだまま、

「あなたのお名前は？」

確認する為に尋ねた。目の前の青年が俺の本当に知っている青年かどうかを。

「ルイ・サイファー。ルイとでも呼んでくれたまえ。」

今までで一番いい笑みを見せつつ、ルシ^ルフ^{アイ}は答えた。

その直後俺自身と俺の視界は、目も開けられない程に眩しい光に包まれた。

葛葉ゲイリン

眩しい光が収まった後、最初に感じたのは鳥の鳴き声だった。次に感じたのはうつそうと生い茂る草木の匂いと腐葉土を踏む感触で、最後に取り戻した視界には薄暗い木立が映っている。右手はなにもつかんでいない。先ほどの青年、ルイの姿はもう無い。

空を握っている手を見て気づく。受験勉強で出来たペンだこは無くなり、小さくて丸みのある手に変わっている。さらに視線を下に移すと、手と同様小さくなった足と丁度良いサイズの運動着が目に入る。

どうやら契約は成立して対価はきちんと支払われ、俺は8歳くらいの子供に戻っているらしい。よくある若返ったら服がぶかぶかだったり、ましてや上着を取られたりなんて事は無かった。下を向くと、ご丁寧にも昔着ていた服と履いていた運動靴が着せてある。

ルイの言葉を信じるなら、俺の今いる世界は彼が連れていきたかった世界。そして今立っているこの森が、デビルサマナー悪魔召喚師となる為にふさわしい場所なのだろう。

……けれど、これからどうしようか。人前に直接現れるのはまずいのだろうが、人の気配を少しも感じない場所に転移させられてしまったのも良くはない気がする。木々

が乱立している為見通しが悪く、枝と葉の合間を縫って木漏れ日が僅かしか地面に届いていない。

実は見えないだけで、すぐ近くに人の生活圏があるのだろうか。それともこの山で生き残る事が、召喚師になる為に必要なのだろうか。

(サバイバルの知識をもつと知っておけばよかつたかな。いやそれ以前に、ルイにもうちよつと説明をしてもらえばよかつた。)

そう物思いに耽りながら辺りを見回していると、視界の端にあるものを捉えた。

その影は女の人の形をしているものの、その大きさは1mにも満たないと思う。背中には蝶のような羽が生えており、背中からその羽を如何やって出しているのかわからないが現代のミニスカ浴衣風の着物を着ている。背中側に穴でも開いているのだろうか。

着物である点を除けば、メガテン作品おなじみのピクシーの姿がそこにあつた。いや、この特徴的な着物はもしかしたら……。

「いきなり人が現れたって聞いたから来てみたけど、誰だろー。」

ピクシーらしき悪魔は独り言のように呟いた。事実独り言だったのだろう。普段から悪魔たちの姿が見える人はそう多くはない。前の世界には俺の知る限り一人もいなかった。

俺は前の世界の癖で、条件反射的に気づいてないフリをしてしまう。ピクシーの目を

誤魔化せているのか分からないが、彼女は俺を観察するように俺の周囲をゆつくりと飛んでいる。

「ただ迷い込んだなら、メンドウだけど麓まで誘導しないとねー。そのあとゲイリンに報告かなー。」

ピクシーという妖精は、人に様々な悪戯をする妖精だといわれている。伝承では人を迷わせる力もあるらしく、それを応用すれば麓まで送り返すこともできるのだろう。

けれどこのピクシーの姿を見て、そして「ゲイリン」の名を聞いた俺は確信した。この世界がどの世界なのか、そして俺がサマナーとしての力を身に付ける為には、ゲイリンに弟子入りするのが一番だと。

その為には、人里に行く訳にはいかない。ゲイリンの従えている悪魔―「仲魔」であろうこのピクシーと会話しなくては。そう思い、俺はなけなしの勇気を振り絞って声をかける。

「こんにちは、君は妖精さん?」

「……………なんだ、見えてたんじゃん、もっと早く言つてよ。」

ピクシーは少々驚きつつ、少し距離を取った後答えた。砕けた口調だが、その声には警戒の色が混じっていた。

「ごめんね、万が一悪戯でもされたら困るから。ゲイリンさんって人に会いにきたん

だ。」

「サマナーに何の用？」

俺を見る目が険しくなる。声もより一層警戒の色が強くなる。

「単刀直入に言おうと、弟子入り。君みたいなのが見えるし判るんだけど、僕には戦う力がないから。」

「うーん、本当かなー？」

ピクシーは腕を組んで悩んでいる。悩んでいる最中も、目は俺を向いていて隙がない。

なんだか会話が進むにつれて、より一層疑われている気がする。此処が何処かを知らずに転移させられたから、会うために来たつてのは嘘だけど、会いたいし弟子入りしたいと思っっているのは本当なのだが。

少々ピクシーは考え込んだ後、何かを思いついたように口を開く。

「そーだ、本当に戦う力がないか確かめてみればいいんだ。」

言うが早いかピクシーが電撃を飛ばしてきた。放った電撃は実際のものとは比べてスピードは遅く、ボウガンの矢ほどの速さでしかないが俺にとつては目で追うだけで精一杯だ。電撃は俺から少し離れた木の幹に当たり甲高い音を鳴らした。

「フフフ。次はどうかなー。君は何もしないのかなー？」

そういつて、片手をこちらに向けてくる。手元で唸る雷光は、早打ちをしてきたさっきの光よりも数倍明るい。速さはどうなるかは分からないが、さつきより威力は高くなつた気がする。

次の電撃も外してくれる保証はないし、今の俺には避けられそうもない。万事休すかと思われたその時、

「ステイよ、ピクシー。」

はつきりとした通りのいい声とともに茂みをかき分け、初老をやや過ぎたであろう女性近づいてくる。白髪交じりの長い黒髪であるもの、日本人離れしたくつきりとした目鼻立ちには西洋人の血が混じっていることを伺わせる。

その女性の一言でピクシーは攻撃を中断し、大人しく宙を浮いている。この女性がピクシーのサマナーであるゲイリンなのだろう。

「話は途中から聞いていたわ、弟子入りを希望するセオリーなのね。」

そういつて目の前の女性は、俺を頭の天辺から爪先まで眺める。一通り眺め終えた後、真つすぐ俺の目を見て口を開く。

「では、いくつか質問します。弟子入りがしたいなら正直に答えるプロセスを希望するわ。」

そういつて左手で腰のポーチから金属質の試験管の様な形状をした管を取り出すと、

軽く横に一文字に振る。すると管から同じ色の光の束が伸びていき、その先に新たな悪魔が召喚される。骸骨姿のその悪魔は下半身は地面に埋まっているのか見えないものの、地表に出ている上半身だけでも2mは優に超えているほど大きい。

骨や歯がぶつかり合ってカタカタと音を立てている骸骨の悪魔。見た目の恐ろしさもあるが、それ以上にこの悪魔の持つ「特技」はとても厄介だ。俺の記憶が正しければ、この悪魔の前では嘘はつかないほうがいい。女性の言葉もあるし正直に答えた方が身の為だろう。

「ペアレンツは？」

「……いません。」

両親についての質問。俺の今の容姿を考えれば至極真つ当だが、いきなり正直に答えづらい質問が来た。なので屁理屈ではあるが、なるべく嘘にならない形で返答した。前の世界の両親は健在だが、この世界には居ないだろうから。

「此処へはどうやって来たの？」

「ルイというお兄さんに連れて来てもらいました。」

「では、私に会いに来たというプロセスも？」

「そのお兄さんに、此処に来れば戦う術を身に付けられると聞いています。」

そして質問が止む。何かを考え込んでいる様だ。此方の事情がばれたのだろうか、そ

う思つて不安になりながら女性を見つめる。

「これも、何かの運命のセオリーかしらね。」

やがて考えがまとまったのか此方を見て独り言のように呟いた。そして俺に近寄ると、しゃがみ込んで目線を合わせてこう言った。

「いいわ、私【十九代目葛葉くすのはゲイリン】の弟子となることを許します。これからよろしくのセオリーよ。」

こうして俺は、デビルサマナーになる為の新世界での第一歩を踏み出した。

時間はゲイリンと呼ばれる女性が少年に会う少し前に遡る。

山陰地方の天斗樹林と呼ばれる森、その木々が密集してうす暗い中を一人のデビルサマナーと悪魔が歩いてた。

そのデビルサマナーは葛葉ゲイリンと呼ばれる女性で、古くから悪魔などの霊的脅威からこの山陰地方、ひいては国家の霊的防衛を担う一族の末裔である。

そのサマナー葛葉ゲイリンと、仲魔の和服を着たピクシーであるハイピクシーは日々行っている鍛錬を終えたところだった。

鍛錬を終えた一人と一匹が彼女らの住まいへ帰ろうとすると、森の中がいつもより少

し騒がしいことに気づく。

直ぐ様ゲイリンは特に交渉術にたけた仲魔を召喚して、森に棲む悪魔たちから情報を集める。集めた情報によると人の子供が森の割と深いところまで入り込んでいるらしい。

その情報を聞いて彼女は少し疑問に思う。というのも、この森は仲魔のハイピクシーを筆頭とした複数の妖精たちによって、一般人であれば森の奥まで入って来れない人避けの結果が施されている。

かといって彼女の様なサマナーかというところ、それも心当たりはない。同業者、ましてや年端もいかない子供の誰かが、訪ねてくる予定など無かった。

しかしいつまでもこうして考えているわけにもいかない、彼女は次の行動に移る。万が一その子がただの一般人ならば、森の中で一人というのは危険だ。それが悪魔の多いこの森なら尚更。

「ハイピクシー、ちよつと先に言って様子を見て来てくれない？ 私もすぐ追いつくから。」

「オツケー、先に行って遊んでるよゲイリン。」

そういつて木々を超えて仲魔のハイピクシーは一直線にその少年のもとに向かう。後を追いかけて彼女も走り出す。

彼女がしばらく走っていると先行していたハイピクシーから念話が届く。目標の子供を見つけたらしい。

（見つけたよー、人間の少年だね。今のところこっちには気づいていないみたい。）
（わかった、もう少しでそっちに私も着く。誘導できるなら準備しといて。）

いる場所が場所なのでやはり怪しいものの、ただの子供なら普通に返して終わりだ。ハイピクシーの人払いを応用して麓まで誘導すればいい、少し安堵した彼女は走るスピードを落とす。そんな彼女にまたしても念話が届く。

（…… あっちから話しかけてきた。気づいてないのはフリだったみたい。）
（会話ができるなら色々聞きだして。私も物陰で聞いているから。）

それを聞いて彼女は再度走るスピードを上げる。数十秒もしないうちに木々の隙間からハイピクシーと、10歳は行かないだろう年齢の少年が話しているのが見えてきた。二人の会話が聞こえる距離に身を隠す。

そして、少年が悪魔を視認できるものの戦うことはできないこと、戦う力を見に付ける為彼女に弟子入りを希望していることを知る。その理由を彼女は理解できない訳では無いが、やはり戦えない少年がこの場所にいる事が気にかかった。その疑惑を払うため、彼女は仲間のハイピクシーに指示を出す。

彼女の指示を聞いたハイピクシーは、さも自分が思いついたかのように一芝居打って

少年の傍の木に電撃魔法ジオを放つ。

ゲイリンはその際の少年の反応をしつかりと目で観察した。少々の驚きと怯えが表情に出ていて、そしていつ逃げてもいいように体の重心が少し後ろに落ちている。

電撃の威嚇射撃を見ても悪魔が放ったこと自体には必要以上に驚かず、敵意は無くそれよりも逃走に意識が傾いている。その様子を見る限り戦う手段がないというのは本当のようだ。

少なくともここで争いにはならない。そう確信した彼女は、ハイピクシーに攻撃を止めさせ、少年の前に姿を現した。

改めて見てみると少年の容姿は目つきなどが多少拗ねた印象があるものの、黒髪黒目の比較的平凡なものだった。なぜこんな所に入り込めたのか不思議なくらいに。

「では、いくつか質問します。弟子入りがしたいなら正直に答えるプロセスを希望するわ。」

そういって、彼女は悪魔を封じた管、封魔管から新たに仲魔を呼び出す。呼び出すのは「外法族 ガシヤドクロ」という悪魔。大きな骸骨という外見が与えるプレッシャーもさることながら、外法族という分類であるこの悪魔は、相手の考えていることを読み取ることができる特技「読心術」を持つ。この特技によって目の前の少年が何を考えているのか、念のために確認しておこうと思っていた。

しかし今回ばかりはいつもの様にはいかなかった。数度にわたる質問の際に読心術を試みたものの、ノイズの様なものが伝わってくるだけ。少年が何を考えているのかが読み取れなかった。本来こんなことはなかなか起こらないものだし、これでは少年の言葉以外に判断できるものがない。

このようなケースは稀なもの、彼女には一つ心当たりがあった。それは悪魔による子供の取り違えや神隠しの類。そういつたケースでは、今までの記憶が封印されたり混濁したりして、その記憶に関する心の中は読み取りにくくなることがある。

考えが読み取れない事と森の奥まで来ている事から、「ルイという青年に連れてこられた」という少年の発言は真実なのだろう、そう彼女は考えた。そして、両親がいらないというのも真実かもしれないとも。

考えがまとまったところで顔を上げる。すると、少し不安げに彼女を見上げる少年の顔が目に入った。

(似ているかもしれない)

彼女は先代のゲイリンであり母である風のことを思い出していた。十八代目である風には両親がおらず、外国人の血を引いているが故に周囲から疎まれていた。ハイピクシーが見えていた風はサマナーとしての素質を十七代目のゲイリンに見い出され、弟子となった。

両親がおらず、悪魔を見ることができない。彼女の目には、容姿は似ても似つかないが同じ境遇の少年に、亡き母が重なつて見えた気がした。

「いいわ、私【十九代目葛葉ゲイリン】の弟子となることを許します。これからよろしくのセオリーよ。」

そういつて彼女は少年の手を取つて歩き出す。

歩きながら少年の顔を横目に見る。弟子入りが認められてほつとしていいのか年相応の表情を見せているを見て、一つ大事な事を質問し忘れていたのを思い出した。

「そういえば、ボーイの名前を聞いてなかったわね。お名前は？」

少年は一瞬だがキョトンとした表情を見せ、そのあとなぜか思案顔で答えた。

「……藤本蔓也（ふじもと かずや）と言います。今後ともよろしく願います。」